

江戸時代の新発田城

雲は低く垂れ込み時折小雨が顔を打つ。日本海側特有の灰色の天気であった。そこは何となく寂しさが漂う場所であった。昔は晴れやかで高貴な舞台であったろう。しかし今は兵どもが夢の跡で人影一人見ることが出来ない。新潟県新発田市にある明治維新まで12代続いた新発田藩10万石の新発田城に立ち寄った時のこと。

室町時代この場所は鎌倉御家人佐々木加地氏の一族の新発田氏の居館があった。戦国期に上杉景勝との抗争の結果1587年落城。その後秀吉の命により溝口秀勝が新発田重家の城跡を取り入れ、版籍奉還までの270年間もの長きに渡って外様大名溝口氏の居城となった。

明治の初めまでは本丸・二の丸・三の丸、櫓が11棟、主な門が5棟あったが、表門と旧二の丸隅櫓のみを残し新政府の命令で取り壊された。その後は陸軍省の兵営地として、更には陸上自衛隊駐屯地として今に至っている。

残された建物は国重要文化財、市指定文化財(史跡)にもなり文化性の高い貴重なものである。しかしこの場所はいずれの時代にあっても不思議としか思えない、絶えず戦いの場であったという宿命を担わされているように感じられてならない。

戦争ほど残酷なものはない。戦争ほど悲惨なものはない。これまでの歴史の中でどれほど多くの尊い命を無駄にしてきたであろうか。どれほど悲しい絶望の涙を流してきたであろうか。平和な社会構築のためこれからも人類は努力し続けたいものだ。

撮影 2013年春

